

## M f o r M a s q u e r a d e

### トラック3 毒のように染み込む

(SE：オナホ：ゆっくり：小さく)

咲 「先輩、しっかりしてください。顔に出てますよ？

気持ち良いのは分かりますけど、ここで誰かにバレたら……。

ふふ。分かりますよね？

さて、行きましょうか。」

(SE：歩く)

咲 「あら、早速誰か来ましたね。」

(SE：両方の歩く音：交差して止まる)

咲 「こんにちは。お疲れ様です。

ああ、これですか？古い資料が未整理のままだったので、片付けようと思いましたが、どうしても一人では無理だったので、先輩に頼んだんです。

ねえ、先輩？ふふ。

はい。ではこれで。」

(SE：歩く音：逆に交差し消えて行く)

咲 「最初は何とかなりましたね。

緊張していますか？心臓の動悸が私にまで聞こえますよ？

先輩、顔が乱れてます。これじゃ、誰かに疑われるかも知れませんね。

それに、先輩のそんな顔を見てますと、私も集中出来なくなるんですよ。

力加減が出来なくなるかも……分かりますよね？ですから、頑張ってください。

あ、また人が来ました。しっかりしてくださいね。」

(SE：両方の歩く音：交差して止まる)

咲 「こんにちは。お疲れ様です。

あ、私ですか？大丈夫です。先輩のカウンセリングで、良くなりました。ご心配、

ありがとうございます。全て先輩のお陰ですよ。

うん？音、ですか？さあ、何でしょう？私には聞こえませんが。

あれ、先輩、顔が赤いですよ？具合でも悪いんですか？

すみません。気付かずにお願いしちゃって……。

あの、宜しければ先輩の代わりに荷物を運んでくださいますか？

私の力では無理でして……。ありがとうございます。

先輩、良かったです。荷物運んでくださるそうですよ。

お任せして休まれては……？あ、そうですか。

無理なさらずとも……。ふふ……。

すみません。お願いしたばかりに、先輩がどうしてもって。ですから、先輩にお任せ致しますので。

ご厚意ありがとうございます。はい。先輩のことは心配しないでください。ちゃんと休ませますので。ふふ。では、失礼致します。」

(SE：歩く音：逆に交差し消えて行く)

咲 「もう、慌てちゃって。

私の方から先輩を困らせること、予想外でした？ふふ。

戸惑い乱れる先輩の顔……とても可愛かったですよ？私好みで……。

さあ、もうちょっと頑張ってください。ほら、あっち。先輩の解放される場所が、すぐそこなんですよ？

後少し、後少しで良いんです。頑張れ、頑張れ〜。」

(SE：扉開く歩いて入室)

咲 「おめでとうございます、先輩。無事に辿り着けましたね。

どうでした？スリルたっぷりだったでしょう？

先輩らしくない逸脱だったんでしょうけど、だからこそ気持ち良い行為だったと思います。

ああ、まず荷箱から下ろしましょうか。」

(SE：箱の中を探す音)

(SE：オナホ：普通の早さ)

咲 「力加減はこれで良いですか？私としては結構制御出来てると思いますけど。  
気持ち良いでしょう？先輩の為に、結構高いオナホを用意したんです。  
童貞の先輩には、今までの何よりも強い刺激な筈……。  
我慢の限界でしょうね。ずっとここにいたんなら既に射精してたかも……。  
先輩、早漏ですから。ふふふ。  
どうでした？箱に隠れてオナホコキされながら外を歩いた気分は？  
絶対しない筈の、バレたら罵られるような淫乱を行うその背徳感……。  
堪えられない程気持ち良かったんじゃないですか？  
先輩の気持ち良さを為に、考えたんです。ふふふ。」

咲 「でも、面白いですね。  
生まれ付きのこの超能力。一時はヒーローを夢見たものの、今はただ先輩の性欲  
処理の為に使ってるんですよ。  
色々条件があって、ヒーローには不適合だと判定されたんですけど、  
先輩を気持ち良くさせるには十分な力です。」

咲 「あれ、どうしたんですか？  
何か……不満げに見えますけど。  
言いたいことがおありでしたら言ってください。  
言わなければ、人は分かりませんので。  
ああ、なるほど……。ふふふ。  
やっぱり先輩は可愛いですね。はい。良く言えました。  
気持ち良くなりたいと素直に言うとは、先輩も随分スケベになりましたね。  
恥ずかしがることは無いんです。気持ち良さを求めるのは、自然現象ですから。  
さて。待ちに待ちました、ご褒美の時間です。  
後ろの壁に手を置いて、体を支えるようにしてください。

はい。そうです。腰はちょっと後ろにしてお尻を私の方にしてください。」

(SE：足音)

(SE：服の音) (咲、後ろから密着する)

咲 「先輩の背中、広いですね。

分かりますか？先輩の背中に触れている、柔らかい感触。

成長中なので、まだ大きさは足りないかも知れないけど、柔らかさにだけは自信  
ありますよ？

ふふ。顔を見ずとも、先輩の表情が分かります。

耳が真っ赤ですよ？やっぱり、まだこんな露骨なスキンシップには弱いですね。

あら、ダメですよ、崩れたら。両手でしっかりと支えなきゃ。

先輩が崩れますと私、倒れちゃうんです。可愛い後輩を怪我させるつもりです  
か？

はい。その勢いで。ふふ……。」

(SE：オナホ：普通の早さ)

咲 「気持ちはどうですか？

女の子のお胸から背中に伝わる体温。

お尻から感じるスベスベ、プニプニの太もも。

胸からお腹まで、ゆっくりと撫でる両手の刺激。

何度体験しても慣れない、魔性の快楽でしょう？

女の子の体ってそういうものなんです。

存在自体で男性を誘惑し、思考を曇らせ、ボーッとさせます。

はい。先輩は、もう私から逃れられません。

完全に、私の体の虜になりましたから。

その証拠に……えいつ。」

咲 「ふふ。何でしょう、今の呻きは。

両手で乳首をひねるのがそんなに気に入ったんですか？

ずっと弄ってきた甲斐がありますね。

最初は微妙なお顔でしたのに、ここまで開発されて……。

乳首だけでこんな泣き声を上げる先輩のこと、社会では何と呼ぶのか知ってますか？

変・態・マ・ゾ。

はい。先輩は完璧なマゾに成り下がったんです。

違いますか？本当に？ふふ。」

(SE：服の擦れる音)

咲 「乳首を撫でただけなのに、オナホからこんな嫌らしい音が鳴ってるんですよ？

恥ずかしいからって、嘘はいけません。

ウソツキの悪い子には、お仕置きですよ？

乳首の周りを指でぐりぐりと焦らして……。

人差し指で撫でて……一気にポチッと。

ふふふふ。あら、あら。気持ちが良いすぎたか、腰が崩れそうになっちゃって。

それではダメですよ。言ったじゃないですか。

先輩が崩れると、私まで倒れるんですよ。

それで、怪我でもしたら、どう責任を取るつもりですか。ふふ。

先輩もそろそろ、自分の幸運に気付いて良い筈なのに。

そう。先輩は幸運児なんです。

だって、自分の手を使わずに、乳首を指で弄られながらオナホでおちんちんシコられてるんですよ？

普通はこんな経験、出来ませんよ。

それに、女の子に弄られて興奮する、人並み以上の性欲を持った先輩を好きになる女の子って、果たして、いるんでしょうか。

私だから、先輩の性欲が処理出来るんですよ。

どうです？これで分かりました？

自分がどれ程情けなく、だらしなく、悲惨なのか。

私がどれ程慈しみ深く、美しく、気遣いの良い女性なのか。

そう。私達は端から違うんです。

なのに、私はわざわざ先輩の相手をしているんですよ？

ありがたくないんですか？敢えて言うのなら、先輩は私を崇拜しても足りないんですよ？

ふふ。良い子。恥ずかしがり屋なのに、素直で、理解も早い。

流石先輩。目を付けていた甲斐がありました。

はい。先輩は違うんです。普通の男達は、愚かですよ。」

(SE：服の擦れる音)

咲 「例えば、先出くわした二人。

話をしながら私のお胸や足を視姦していました。

遠くからお尻まで視姦していたんですよ。

以前からそうでした。あの二人だけではありません。

ここの男達は皆、私のこと視姦していたんですよ？

きっと気付かれないと思って。

でも、それはバカな男達の勘違いなんです。

女の子には分かります。

だって、あんなに視線がべと付くんですよ。

あんな気持ち悪いのが身に触れて知らずしていられます？

でも、先輩は違った。

寧ろ私の体から目を逸らして話していました。

ふふ。気付かないとお思いでしたか？

ねえ、先輩。どうしてだと思えます？

どうして先輩は私の体が直視出来なかったんでしょう？

ふふ。分からない？そうですか。面白いですね。ふふふ。

大丈夫です。いずれきっと分かります。

心配しないでください。私が先輩のお側で、答えが見付かるように助けてあげますから。」

(SE：オナホ：早く)

咲 「そろそろ……出したくないですか？

良く我慢出来ました。結構焦らしていたのに、未だ射精しないとは。

えらい、えらい。ふふ。

これも全て、先輩の早漏を改善する為なんですよ。

決して私個人の欲望ではないですから。

ふふ、分かれば良いですよ。それより、呼吸が乱れていますね。

いきそうなんですか？直ぐにでも射精しそうに見えますが。

じゃ、今日はカウントをしてみましょう。

私が<sup>ゼロ</sup>0まで数える前に出してはいけません。

簡単でしょう？では十から数えます。」

咲 「10。

あと少し。あと少しの辛抱です。

9。

心臓の鼓動が早くなったみたい。そんなに興奮しますか？

8。

うん？ふふ……ヨダレが顎をなぞって地面まで垂らされてますよ？

7。

困りますね。まだ半分以上残ってますよ？

6。

我慢しきれなかったら、お仕置きですよ。それも辛〜く苦しい。

5。

まさか、お仕置きが欲しくてわざとしているんじゃないでしょうね？ふふ。

4。

全身が痙攣しているのが感じられます。必死に我慢しているんですね？

3。

嬉しいな。私の指示を守ろうと頑張っちゃって。

2。

でも残念でしたね、先輩。可哀想に……。

1。

私、0を言うつもりなんてありませんよ……？

ふふふ。はははは。何てことでしょう。可哀想な先輩。

必死に我慢したのに。これで出せると希望を持って頑張ったのに。

虚しくも、全て無駄になっちゃいますね。

1…… 1…… 1……。

決して0にはなりませんよ。

白いのをびゅびゅっと激しくオナホに出したいんでしょうけど……。

おあいにく。私の許可無しでは出来ない。

私無しでは射精も楽に出来ない、情けない、可哀想な人。」

咲 「ねえ。射精しちゃえば？

これ以上我慢出来ないじゃないですか。

充分頑張ったじゃないですか。

ほら、ほら。精液が尿道から零れ出ることを想像してみてください。

電気が流れるような快楽。これまで経験したことの無い気持ち良さ。

欲しくないですか？心躍りませんか？

男らしく、やっちゃいましょう？後のことなんて気にせずに……。

ああ～。頭の中が真っ白になりますね。

やっちゃって？やっちゃって。

射精しなさい。このマゾ！」



(SE：射精)

咲 「ふふ。結局、射精しちゃったんですね。  
約束一つ守れない、情けない先輩。  
でも、そんな先輩を直様叱りつけない程、私の心は広いんです。  
まずは、射精を見届けてあげます。  
最後の一滴まで出せるように、ちゃんと付き合っただけから。  
ふふ。遠慮はいりません。私のお気遣いなんですから。」

咲 「すごいですね。オナホから零れ落ちた精液が地面一杯。ふふふ。  
すっきりしました？足が震えていますよ？  
恐らくは、立ってるだけで精一杯。  
気持ち良かったでしょう？あんなに長く我慢したんですから、気持ち良くない  
筈、ありませんね。  
でも、がっかりです。私との約束、守らなかった……。  
まあ、守れると思ってなかったんですが。ふふふ。  
お仕置きされる覚悟は、出来ましたよね？先・輩。  
ふふ。そんなに怯えなくて良いんです。  
今すぐ何かをしようとは思ってません。  
このお仕置きは、後のお楽しみで。  
今はただ、射精直後の気持ち良さに浸ってください。  
では、私はこれで失礼します。  
念力をここまで使ったのは久しぶりなんで、流石の私でも疲れしました。」

(SE：歩き出して止まる)

咲 「あ、それと、床は早く掃除しといた方が良いでしょう。  
誰か入ったら、匂いで分かりますので。  
ふふ。では、後程。可愛い先輩。」

(SE：扉を抜け出してフェードアウト)